

パネルディスカッション



パネラー(写真左から)

吉岡 崇仁 よしおか たかひと
(京都大学フィールド科学教育研究センター教授)

上野 正博 うえの まさひろ
(京都大学フィールド科学教育研究センター助教)

椿 宜高 つばき よしたか
(京大大学生態学研究センター教授)

奥田 昇 おくだ のほる
(京大大学生態学研究センター准教授)

谷内 茂雄 やち しげお
(京大大学生態学研究センター准教授)

森里海のつながりを生物多様性から考える

益田 皆さん、こんにちは。京大の舞鶴水産実験所の益田です。

第二部のコーダイネーターを務めさせていただきます。

コーダイネーターを務めるのですが、私自身は実際「森里海のつながり」を研究するようなことはほとんどやっておりません。もっぱら海に潜って、潜水調査なんかをやっております。この一週間で、沖繩の宮古島と若狭湾、能登半島で潜ってきました。

で、どこで潜ってもいいかというところではなくて、やはり「潜ってみたなあ」と思うような場所が、それぞれのところであるのですね。先ほど只木先生が「木曾のヒノキ林は、品があつていい」というお話をされましたが、海の中にもこういう場所が「ある、ある」と思いながら聞いておりました。

多様性ということ考えた時、何か直感的に「心地よい」と感じるものがあるのですね。それも多様性の価値の、二つの基準になるのかなあと思いますし、そういうのを感じる心を育てるっていうこともまた、里の機能としてあるのかなあということも考えました。只木先生には、「里山がどうして必要か、何で必要か」ということも、詳しくわかりやすく説明してもらえました。さらに、米が森を作つて、森を守つてきたと。で、森が米を作つてきたのだとい

うような話があつて、なるほどとこれまた納得したのです。が、現在の日本の水田は、それが本来機能してきた状態ではなくなつてきているということが、第二部のお話の中でいろいろ出てきます。

もう一つ、向井先生のお話で「水と砂の流れを絶つことが、多様性の減少につながる」という非常にスケールの大きなお話が紹介されていましたが、この第二部では、もう少しスケールが小さいという語弊がありますが、身近な話題から話を進めていきたいと思ひます。

五人の先生に登壇いただいています。最初はフィールド研の吉岡先生のお話です。吉岡先生は声生の、由良川の源流で植生が大分変わつてきている。その原因がシカによる食害にあるようだ、そのようなお話をさせていただきます。

つづいて、フィールド研の上野先生です。上野先生には、由良川の流域、河口、海までを含めて、いろんな生物層と水質を調査している「WAK WAK」というプロジェクトの取り仕切りをやつていただいています。上野先生は、「調査してみると、由良川はすごいぶんきれいな川なのだけれども、本来、川にはいないはずの植物プラ

ンクトンがいる。田んぼから入ってきている水が原因だろう」と言
つておられますが、そのような話題を提供していただきます。

つづいて生態学研究センターに話をつないでもらって、椿先生に
は里の代表的な生き物である赤とんぼ、正式には「アキアカネ」
ですが、最近ずいぶん数が減ってきているというお話をしていただ
きます。この激減している原因は何なのか、そういう研究から、
生態学がこの多様性の維持にいったいどういう貢献ができるの
か、といった話題を提供してもらいます。

引き続き、生態研の奥田先生には琵琶湖の魚類層のお話をし

てもらいます。琵琶湖の魚類ではコイ科の魚が多様性の維持に
すごく重要なのですが、こういった魚にとつて、田んぼと琵琶湖を
つなぐ狭い水路、それも従来からあるような水路が大変重要だ、
というお話をさせていただきます。

最後は谷内(やち)先生に、田んぼからの水が琵琶湖の水をずい
ぶん汚くしているよんだというお話をさせていただきます。では、ど
ういう風にしていったらいいのか。そういう観点から、流域の管理、
流域ガバナンスという考え方を紹介していただくと思います。

それではまず吉岡先生、お願いします。



コーディネーター

益田 玲爾 ますだ れいじ

(京都大学フィールド科学教育研究センター准教授)

1965年、横浜生まれ。静岡大学理学部卒業、
東京大学博士課程修了。スコットランドに2
年留学、ハワイの海洋研究所で2年間勤め
たのち、2000年4月から京都大学舞鶴水産
実験所に勤務。魚の行動や生態について
の疑問を実験と観察から解決する「魚類
心理学」が専門。著書に『魚の心をさぐる』
(成山堂)がある。